

為

蕙

蘭



高祖御廟、朝奉之記

高二 麻生頼忠

鏡警黎明を告ぐ石床を高れ、一聲激し直に坊窓を穿て
 小廟前に向ふ路に穴すれば十餘にして供養橋を懸中尤
 小化堂を拜して石階を登るに老杉高く聳えて雲深く暮
 ぬしに玉垣は中興の至塔を圍み薄暗く上る朝霧を吹
 き来り曉風に晴小渡り生氣溢る、東天の曙光貫塔の金
 文字と相映じ床しく送る香の匂にさそはれて我は何
 時し十襟を正して信念口唱し居たり惟心に吾祖九々年
 の長き要霜を頭慮に送らせ給ひしかと独り昔日を偲び
 下敬慕の情は恰も我を王の父母ともし尊し嗚呼偉大

たゞ哉吾祖の威徳四山四河の中に掌の廣さ程の手かた
扇あり及處に庵蓋を結んむ天雨を脱れ木の皮をばぎて
四壁とし自死の處の皮を衣とし香は炭を打りて身を養
ひ秋は果を採りて命を又去る十一月より雪降り積り
て改年の正月今に總ゆる事なし庵蓋は七尺雪は一丈四
壁は氷を壁とし口すとの聖訓自ら肝に銘して感涙禁ゆる
能はず斯の如き事酸を述ばし結おしは唯々濁末の汚度
世ら水んかたぬは其門下たる者人争か自己を反省
して祖恩の萬分を報せざらんやと深き感銘を與えらぬ
たり躰を右方環拝す水は神靈業に在り可常在殿は高く
仰かれ下は一面廣く各丈段及び信徑の墳墓あり一設高
整然たりは本山歴廿の願なりを尋み天師は六百三系の
吾祖の跡を承起して其放流を懐弘せらぬとねと拜

自任しつゝ、殿小入り請経時の移ると知らず打しも法華
の誓山谷に響けるゝ聞く春院動終了の鐘ひらんと匂
々として坊に飯りまの記をなしぬ

興院の登山の記

中三

三和連成

興院とは即ち興近山の山嶺にして攀躡里半則高祖上
人の其父母の廟を遷移し給ふたる旧跡なり友を誘ふと
發中余興院に登山する事今回を以て始めとす祖堂裏と
り登る運の両側は即ち杉檜の叢林にして深々と繁茂し
大^佛の光可達し遠に日新の寺と見ゆふと行くまると二十
餘ヤにきて是光堂に至る一林にしてやう響ももて高士見
石は運を腰下して懸身す而して湯が所望は然るに不幸
にして雲口彼の優婆塞に逸りて望見する所得ず餘余友人
に語りて曰く已に去後十數年の春松経たるといふ事あり